
神の奥つ城(おくつき)

佐治 るみ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の奥つ城^{おくつき}

【Nコード】

N9739B

【作者名】

佐治 るみ子

【あらすじ】

龍神様の宿る宝剣が盗まれた。困った龍神様は…。

神代かみよと呼ぶには時代が下りすぎた、それでもずいぶん昔の話である。板の間のような床の上に女が直じかに寝そべっている。浅葱色の服の、しどけなく寝乱ねみだれれた裾すそから、細身の白い袴はかまを履はいた足あしが覗のぞいている。部屋は天井や壁に至るまですべて檜ひのきの白木造しろぎつくくりで、どうやら普通の住居ではないらしい。女の周りには徳利や椀が散乱しており、ゆうべ深酒をした様子である。

外に目をやれば、晩夏の陽は既に高々と昇っている。女が横たわっているのは神社の本殿ほんでんのようだ。

「龍神さまー！ 龍神さまああ！ 一大事にございますー！」

男が一人、本殿めがけて、血相を変えて走ってくる。身なりからすると、どうやらこの神社の神主であるようだ。

やっとのことで辿たどり着くと、男は本殿の扉を勢いよく開けた。

「龍神さま、大変なことに…」

女はゆっくりと体を起こした。男は喉元まで出かかっていた言葉を飲み込んだ。女があまりにも不機嫌そうだったからだ。

しかし男は、これは女の機嫌がどうであれ言わねばならぬと腹くを括くつた。やがてゆっくりと、腹から絞しぼり出すように言葉を発した。

「龍神さま、御神体ごしんたいを移した宝剣ほうけんを領主さまが…」

女は男の言葉を遮さへって言った。

「そなた、誰だ」

男は小さな目を鳩のように丸くして女を見つめたまま、動けなくなっってしまった。

この小さな神社に降つて湧いた、神主の言う一大事を理解するためには、時間を少し遡る必要がある。

龍神の宿る滝がある。いつの頃からか川べりに祠が建ち、神社が出来て、龍神を祀るようになった。その龍神が人間の姿となって現れたのが、本殿に寝ていた女である。

さて川べりの祠が長年風雨に晒されて、随分と傷んでしまっていた。立て替える必要があるが、それにはまずこの川を御神体とする龍神を別の場所に移さねばならない。そこで神主は神事を執り行い、龍神を神社に伝わる宝剣に移した。しばらくするとこの話が辺り一帯を治める領主の耳に入った。

領主は「神の宿る宝剣」に興味を示し、どうにかして手に入れたいと思った。が、宿っているのが龍神だけに迂闊に手を出すことができない。

やがて祠は完成し、村人たちはそれを祝つて酒盛りをした。龍神をはじめ、神々は人と共に飲み、食い、明け方まで騒いだあげく、疲れ果てて寝てしまった。

領主はその時を狙った。

朝、多くの神々が眠りこけている頃合いを見計らつて神社に使者をよこし、応対に出た神主と押問答の末、殆ど力づくで宝剣を奪い去つたのだつた。

「そちは誰かと問うておるのだ」

龍神の女の声に、神主は我に返つた。

「まさか、私をお忘れではございませんまいな。私はこの神社の神主で、長年龍神様をお祀りしております者にございます」

「覚えておらぬ」

いくら説明されても覚えていないものは仕方がない。龍神はまだ合点がいかぬ様子である。

そこへ、別の女がやってきた。鮮やかな紅くれないの着物の似合う、妖艶ようえんな美女である。神主が気づいて深々とお辞儀をする。

「これはこれはお稲荷様、結構なお天気で…」
「どうやらこの女も、ただ者ではないらしい。」

お稲荷様と呼ばれた女は、神主を睨にらみながらこう言った。

「ねえ、さつき起きたらこの子の御神体の気配がないんだけど、もしかして、あんた、なくしたんじゃないでしょうね？」

神主の額から脂汗あぶらあせが噴ふき出した。

稲荷は顔だけ龍神の方を向いて言った。

「で、あんた、あの剣の在処あrika、分かるかい？」

龍神は、かぶりを振った。

「はあ、やれやれ」

稲荷は大袈裟おおげさに溜息ためいきをついた。神主がおずおずと尋ねた。

「あのう、これは一体どうしたことで…」

稲荷は手に持っていた鼓つづみを降ろし、本殿の階段に腰掛けると、話し始めた。

「もつずいぶん前のことになるよ。あたしも御神体をなくされたことがあってねえ。洪水があつてさ。祠ほこがあたしの宝珠ほうしゆもるとも流されて、どっかに行つちまったのさ。村人が総出そしゅでで探してくれたけど、遂ついに見つからずじまいさ。御神体つてのは神様にとつちや家みたいなもんなのよ。それを祀まつってくれてる人間は家族なんつてわけ。その家を手離して、祀まつるのをやめたら、家族でも何でもないの。大抵は忘れちまうのよ、あたしもその村の人たちのことはすっかり忘れたねえ」

話を途中から聞いていた巫女が尋ねた。巫女と言っても、童と呼んでおかしくない子供である。おおかた神主の娘なのであろう。

「龍さまは私のことも忘れたの？」

「ああ、そうさ」

そう言われた途端、^{とたん}巫女は顔を歪めて泣き出した。

龍神のもとへ駆け寄ると、さらに大声を張り上げた。

「龍さまは、あたしのこと忘れてなんかいないもん、うわぁん」

龍神は困惑した。嘘をつくべきか…。しかし子供ほど嘘の通用しない相手はない。

「ごめん、本当に覚えていないんだ…」

龍神はぎこちない手つきで巫女を抱き上げると、稲荷のそばに来て座った。

四

「それで、宝珠は見つかったのですか」

神主が話を元に戻した。巫女は龍神の膝ひざの上で泣きじゃくっている。

「ああ、海まで流れてね、漁師の網にかかったのさ。その男が酒を供えてくれたから、あたしは宝珠を見つけられたのさ。殊勝じゆしやうな奴さ。翌日には神社に持って行こうと思ってたんだってさ」

「つまり、人間が祀らないと、神様でも御神体みかみの在処あじかが分からないと…」

「そうさ、この子に宝剣の在処あじかが分からないってことは、あの剣を誰も祀ってないってことさ。で、あんた、なんだって御神体なんかなくしたのさ」

神主は背中を汗が滝のように流れ落ちるのを感じた。恐る恐る、今朝の顛末てんまつを話し始める。稲荷の顔色が変わった。神主は恐怖に身を縮こまらせた。稲荷が笑う。

「馬鹿だねえ、あたしが怒ってるのは剣を奪ってつた奴の方さ。罰ば当たりにも程ほどがあるじゃないか」
「ようやく泣き止やんだ巫女が口を挟んだ。

「ねえお稲荷様、宝剣を取り返したら龍さまはあたしのこと思い出してくれる？」

「さあ、それは分かんないけど、あたしは思い出さなかったね」

巫女はまた泣きそうな顔をした。

稲荷は龍神ににじり寄った。

「ねえ、剣の在処あじかは分かってたからさ、あんた取り返しなよ」

「どうやって？」

「決まってるじゃないか、天罰を下してやるんだよ」

「でも…」

「馬鹿だねえ、罰当たりなことをした人間に天罰を下すのをためらう神様が、どこの世界にいるってのさ！ ああじれたい、あたし

があんただったら、そいつの家に雷の一つでも落とさなきゃ気が済まないね」

龍神は、巫女を膝の上に乗せたまま、じっと考え込んでいる。

しばらく黙り込んで考えた後、龍神が口を開いた。

「その領主とやらに会ってみよう」

稲荷は目を丸くした。

「会って、どうすんのさ」

「已むに已まれぬ事情があるやもしれぬ」

面白いものが見られると思っていた稲荷は大袈裟に呆れて見せた。

「あーあ、つまんない。で、あんた一人で大丈夫なの？」

「ご同道願えますか」

龍神は居住まいを正して頭を下げた。

稲荷は柄にもなく照れた。

「やめとくれよ、あたしそういうの苦手なんだから、まったく格の高い神様はこれだからヤンなっちゃっうよ」

五

しばらくの後、二人は領主の屋敷の門の前に立っていた。

門は敷地に比べて不釣り合いなほど立派で、昼間だというのに堅く閉ざされている。

稲荷が扉を叩き、大声で用向きを述べるが、こうなることを想定していたのであろう、中は不気味なほど静まりかえり、誰一人として応じない。

「ねえ、扉の向こうに人の気配がするよ、あいつら知ってて返事しないんだ、こんな塀飛び越えちゃおうよ」
稲荷はせっつくが、龍神は首を縦に振らない。

すると、背後の木の上から飛び降りてきた青年がいる。黒い絹の衣が、濡れ髪ことの如くつやつやと輝いている。

「なんだい、居たんなら声ぐらいおかけなよ、八咫鳥やたがらすさん」
八咫鳥は、まっすぐ龍神の方に歩きながら声をかけた。

「今朝の件でお困りなのであろう」

「そうだ。誰も出ない」

龍神は相変わらず要点だけをぼつりと答えた。

「主あぬに会わせよう」

八咫鳥はひらりと門の上に飛び上がると、門の内側で聞き耳を立てていた門番に向かって、

「そなたの主うぢの所業しよわざにより龍神様がお困りである。我等を速やかに目通りさせよ。さもなければ我が天罰をもって報いる」

と言い放った。しかし門番は

「わが主あぬは急な病を得て、今日は何人ともお会いになりませぬ。お引取りを」

と突っぱねた。二度三度、言葉を変えて頼んでみるが、主あぬから相当きつく言われているのだらう、同じ返答を繰り返すばかりで一向に埒らちがあかない。

落ち着いた物腰の八咫鳥もさすがに苛立ちはじめた。そこへ稲荷が
焚きつける。

「ちよいと脅かしちまいなよ」

八咫鳥は帯に挟んでいた笛を抜いた。清々しい笛の音が鳴り渡る。
門番はこれが天罰なのかと、呆氣にとられている。

しばらくすると、ざあつという音がどこからともなく聞こえてきた。
遙か彼方の空に薄雲のようなものがさしている。徐々にこちらに迫
ってくる黒雲の正体を見た時、門番の顔色が変わった。

それは鳥だった。空を埋め尽くさんばかりの、無数の鳥の群だった。
もはや空は真っ暗で、さつきまで陽が差していたのが嘘のようだ。
鳥たちが屋敷の上空を旋回し始めたのを見て取ると、八咫鳥は笛を
持つ手を高々と差し上げた。

「この手を振り下ろせばあの鳥どもが母屋に舞い降りるが、よいか」
門番はまだ状況が飲み込めない。
外で稲荷が合いの手を入れる。

「あれだけの鳥が舞い降りたら、重みで屋根が落ちてあんなのご主
人が死んじまうって言うてンだよ」

門番は腰を抜かさんばかりに驚いて、主に報告しようとはつぷり腰
で駆け出そうとした。と、屋敷の中からもこちらに向かってくるも
のがある。門番に駆け寄ってしばらく話をした後、門を開けさせる
と、額からだらだら汗を流しているくせに口ぶりだけは偉そうにこ
う言っのだった。

「主の特別なお計らいにより目通りを賜る。付いて参れ」

六

ようやく三人は屋敷に入り、広間に通された。が、主はなかなか現れない。

「まさか、逃げる算段をしているんじゃないでしょうね」

「そんなことをしていれば気配を感じぬはずがない」

稲荷と八咫鳥がそんなことを囁きあっていた。龍神は二人の前に座り、俯いて一言も話さない。

やがて廊下からどたと足音が聞こえてきた。太刀を佩き、弓矢を携えた武士が二人、上座に控えた。

そればかりか下座からも二人の武士が入ってくる。謀られたか、と思わず八咫鳥が腰を上げる。

そこへ不意に男が出てきて、

「待たせたな」

と言って上座に座った。男は狩衣の肩をいからせて偉ぶっているが、瘦せぎすの顔のせいでもうにも貧相に見える。主が脇息に寄りかかるのを見計らって、四人の武士は片膝を立てて座る。

今すぐ危害を加えるつもりがないと見て、八咫鳥が腰を下ろし、口を開く。

「我等が何用あって罷り越したか、存じておろうな」

「何のことか判り兼ねますな。身共はただ、屋敷の外で主に会わせよと騒ぐ者が居って家人が難渋しておった故にそなた等に目通りを許したまでのこと」

見え透いた嘘に呆れ果てて、稲荷が叫んだ。

「あんた今朝うちの神社から宝剣を盗ってつたでしょ？ それ、この龍神様のご神体なんだよ、この子が困ってんだから、返してやんなよ」

「そのようなことは露知らず、ご無礼を。しかし、もうしばらくお待ち頂けぬかな」

領主は驚いた顔を作って見せた。嘘だ。鳥はとうに去ったのに、空は一天にわかには掻き曇る。

「何ですよ？」

領主の言葉が嘘であることは差し置いて、稻荷は返せぬ理由に合点がゆかぬ。

「宝剣があまりにも美しいゆえ、噂が瞬く間に国守さまの耳に入り、是非にも見せよとのご下命を賜った。故にそれまでは身共が嚴重にお預かりせねばならぬ」

これも嘘だ。雨が降り出した。

「呆れた！ それまで神社に置いとけばいいじゃない！」

八咫鳥も口を挟む。

「どうしてもとあらば、わが方は劍そのものを必要としておるのではない、龍神様がお宿りしているのが難儀の種ゆえ、龍神様を別の物にお遷しせんと思つが、如何に」

領主は慌てた。

「それは…、それは困りまする」

「何故か」

八咫鳥が問い詰めようとすると、領主は両脇の武士に目配せをした。武士たちはやおら立ち上がり、すらりと太刀を抜いた。外は土砂降り雨である。

「何をするんだい！」

稻荷が鼓を打ち鳴らすと、狐火が現れた。炎は床を走り壁を伝い天井を覆った。

武士たちは一瞬怯んだが、青く冷たい炎が木を焦がすことはないのを見るとじりじりと三人に迫ってきた。

領主は額に汗を浮かべながらもにやにやと薄ら笑いを浮かべ、
「そんな子供騙しの妖術で驚くものか」

と吐き捨てるように言った。遠くで雷の音がする。

八咫鳥が立ち上がるうとした。もう、致し方あるまい…。

七

その時、今まで一言も発しなかった龍神が手で遮った。龍神は立ち上がると領主を見下ろすようにして言った。

「嘘ばかりついて、そなた恥ずかしくないのか」

「滅相もございませぬ。何を根拠に嘘などと」

八咫鳥が一言添えた。

「そなたの言葉には霊が宿っておらぬ。真のことを言っておらぬであらう」

稲妻が空を走り、近くに落ちた。稲荷が言葉を次ぐ。

「あした、あの剣に龍神様が宿ってるって知ってて盗んだんだろ？」

おまけに……」

三人はとうに領主の心を読んで真相を知っている。全部喋ってしまった。おうとする稲荷を制して龍神は言った。

「この者の口から、真実を聞きたい」

武士が三人に切りかかろうとしたまさにその時、轟音とともに母屋に雷が落ちた。領主は小さな叫び声を上げて後ろに飛び下がった。

武士たちも一瞬怯んだ。

龍神は一步前に進んだ。その気迫に、武士たちは動けないでいる。

領主はさらに壁際に縮こまった。

「加えて、先ほどのお稲荷様への無礼な物言い、許せぬ」

雷は激しさを増し、屋敷じゅうに落ちている様子である。龍神の髪が逆立つのを見て、稲荷が慌てて領主に迫る。

「いいから、とにかく謝って返しなよ、今のうちならきつと許してくれるからさ」

屋敷のどこかで火の手が上がったらしく、家人が慌しく駆け回っている。

「早く！ 剣の在処を言うんだよ！」

これ以上怒らせたらどうなるか分からない。稲荷は領主の襟を掴ん

で叫んだ。龍神は黙って領主の目を見つめながら、さらに領主のほうへ歩を進めた。龍神の足が、倒れた脇息にこつんと当たった。領主は壁際に追い詰められたうえ、腰が抜けて逃げることもできない。「お、お許してください、龍神様！ 私わたくしめは何とかして国守こくしゅさまに取り立てて頂きたくて、その、国守さまが珍しいものがお好きだと耳にしたもので…龍神の宿る宝剣ならば見たいと仰るか…お祀りして差し上げなかったのは何とも申し訳なく…その…剣は倉にありまする」

顔を床にすり付けて涙ながらに平伏する領主を見て、龍神は怒る気も失せてしまった。

「命だけは免じてやる。去れ！」

その言葉とともに領主は四つん這いになって広間を抜け出した。武士たちが後に続く。火は母屋にも回り始めたようだ。

「さ、早く倉を探そう」

稻荷が促して、三人は母屋の外に出た。

稻荷と八咫鳥は倉を目指して駆け出した。扉を開けると宝剣の他にも御神体があるようだ。

「もう一つあるようだな」

八咫鳥はそう言うと、二つの桐箱をどこからともなく見つけてきた袋に入れ、縄で縛った。稻荷が振り返ると龍神がいない。

「あれ？ あの子は？」

龍神は火の手の上がるほうへ向かっていた。北の対の火の勢いが、最も強いようである。豪雨のなか、火は衰える気色がない。大勢の人が、あるいは救出に向かい、あるいは逃げ惑い、屋敷の中はこつた返している。

と、竈の神様が大慌てで逃げ出して来た。水干姿の小太りの男で、背は龍神の腰ほどまでしかない。頭の上には大きな釜を乗せている。

「へつついさま！」

龍神が呼び止めた。

「おおこれはこれは、龍神様」

竈の神は釜を下ろし、恭しく礼をした。龍神は挨拶もそこそこに竈の神の肩を掴んで訊いた。

「誰か怪我をしているものはいないか」

「北の方さまが火の手に包まれましてございまする」

駆け出そうとする龍神の手を、竈の神が掴んだ。

「もう間には合いますまい」

龍神はへなへなと座り込んでしまった。土砂降りの雨が体の表面を流れていく。髪の毛にぐつしよりと滲みこんだ雨が俯いた顔を濡らし、鼻先からぽたりぽたりと垂れる。

竈の神は逃げるのを忘れて心配そうに見ている。

「ああ、こんなところにいたのかい」

稲荷の声に龍神は顔を上げた。雨は止みかけていた。

「あーあ、なんて顔だろうね、ほら、取り返したから、帰るよ」

「でも…」

八咫鳥が龍神を起こした。

「私は…」

「話は後ほど伺おう。今はとにかくここを出ることだ」

八咫鳥が龍神の手を引き、稲荷が背を押して、三人は外に出ようとした。龍神は後ろ髪を引かれるように北の対を振り返った。火はくすぶり始めていた。竈の神が釜を頭に乘せるとぼとぼと後をついてくる。竈が焼けて行く当てがないのだ。

「へつついさま！」

龍神は再び竈の神を呼んだ。

「共に来られよ！」

竈の神は嬉しそうに三人のそばに駆け寄った。

門の外には野次馬が群がっていた。狭い門に大勢がつめかけたため、最前列の見物人が押されて中に倒れ込む有様だった。本当は八咫鳥が掻き分けるようにして道を開けてくれたはずなのだが、そんな人込みの中をどうやって抜けてきたのか、龍神はよく覚えていない。

「何をしよげてンのさ」

龍神は相変わらず元気がなかった。

「子供の頃は、怒っても雷が落ちることはなかったのに…」

「あんた、大人になったってことさ」

龍神は驚いて稲荷を見た。

「人間を苦しめるのが神だと言うのなら、私は大人になりたくない
あまり表情を変えない八咫鳥が、ぷつと吹き出した。

「こんな優しい神様に守られて、この辺りの人間は幸せだな」

「そうそう、あたしのことまで言ってくれたときは嬉しかったねえ。

あたしは、子供騙しって言われるの、もう慣れっこなんだけどさ。

それにしても一時はどうなることかと思ったよ。あんたがあんなに怒るの、初めて見たよ。へっついさま見に来れば良かったのに」「ほう、どうせ竈は焼けてしまったのですから、放つといて拝見すれば宜しかったですなあ」

周りが明るく笑い飛ばすほど、龍神の心は暗く沈んでいった。

九

神社に戻るともうこの件は伝わっていて、村人が集まって大騒ぎになつていた。

話を聞きたがる村人たちを遮つて、八咫鳥は荷を解いた。もう一つの御神体は、拳ほどの石ころだった。

「まずはこの御神体をお祀りして、本来の神様にお返しせねば」

神主が用意した三方の上に御神体がそれぞれ置かれ、御神酒と供物が運ばれた。八咫鳥は二つの御神体を見比べてつぶやいた。

「石ころでは国守の気を引けぬと思つたか。浅ましき奴め」

神主が祝詞を奉じはじめると、清楚な若い女が現れた。

「これは、蛇神様ではありませんか、お越し頂かなくともお持ちいたしましたものを」

村人がこう言うと蛇神は

「龍神様にお礼を申し上げようと思ひまして」

と言つた。が、龍神の姿が見当たらない。

「あの子、ちよつと落ち込んでんだよ。後で伝えておくよ」

「では、日を改めます」

祝詞が済むと神主が尋ねた。

「ところで、何故御神体が盗まれたことを仰らなかつたのです」

蛇神が言つた。

「私の御神体はいつの頃からか人間に祀つて貰えなくなつたのです。それで御神体が盗まれたことにすら気づかなかつたのです」

村人たちは顔を見合わせた。全員その場に土下座をすると、長がこう言つた。

「蛇神様、申し訳ございません。これからきちんとお祀り致しますから……」

「じゃ、武勇伝はまた今度つてことにして、蛇神様をお祀りする場所でも作ンなよ」

稲荷が手をたたいて促した。

蛇神様と村人たちが行ってしまつと、稲荷は八咫鳥に言った。

「今日は本当にありがとう。あんたが居なかつたらどうにもならなかつたところだよ。後は私が何とかするから、あんたは鳥たちのもとへ帰つてやんなよ」

八咫鳥は何か言いかけたが、「では後を頼む」とだけ言い残して、帰つて行つた。

稲荷は川べりの祠へ向かつた。日は西に傾きかけて、真新しい祠をあかあかと照らしていた。その長い影の中に龍神が膝を抱えて座っている。顎を膝の上に乗せて、ぼんやりと川面を見つめている。龍神の上衣の長い裾と白い袴は土砂降りの中、領主の屋敷で地べたに座り込んだために泥まみれになつてしまつていた。

「みんな帰つたよ。本殿で着替えて横になりなよ」

稲荷が手を差し伸べると龍神はその手を掴んで立ち上がった。

「あの子のこと、思い出した？」

龍神はかぶりを振つた。

「やっぱりね…。ちよつとかわいそうだね」

稲荷に手をひかれて歩きながら龍神は黙つて俯うつむいていた。沈黙が続くのを嫌つてか、稲荷はひとり喋り続けている。

「いいよねえ、あんたは。あんなすごいことができるんだから。あたしがあんただったら、もっともつとあいつを懲らしめてやるよ。

そんなに落ち込まなくつたつていいんだよ、悪いことした人間に罰を与えるのも神様の仕事なだからさ。ああそうだ、蛇神様があんたにお礼を言つてたよ…」

翌日、龍神は本殿から出てこなかった。供物や御神酒にも手をつけていない。

そんなことがしばらく続いてから、竈の神が本殿を訪れた。中に入ると、がらんとした部屋の中に、龍神が壁にもたれてぼんやりと座り込んでいる。

「元気は出ませんか」

竈の神は人懐っこく声をかけた。

「今日、領主さまのお屋敷に行つて参りましたが、すごいもんですなあ、もう建て直しにかかっておりました」

龍神は振り向きもせず話しかけた。

「そなた、竈が焼けてしまったのだから領主のことも忘れているのに、やはり気になるのか」

「竈が焼けるなどしょつちゅうあることですからなあ。いちいち気にしては、竈の神は務まりませぬ」

龍神は、はつとした。

「これからどうするのだ。あの時はそなたに行く当てがないと思つてああ言つたが、竈の神は二人は要らぬ。ぬか喜びさせたか」

「いいえ滅相もない！あの時は嬉しゅうございました。お屋敷に竈が出来たら帰りますよ。北の方さまがお亡くなりになって寂しくなりますがな…おおそうそう、蛇神様から文をお預かりふみしましてな」
竈の神は懐から文を取り出して龍神のそばにそつと置いて立ち上がった。本殿の扉が開いたとき、龍神は立ち上がって叫んだ。

「へつついさま、許せ！」

竈の神はちよつと驚いた顔をして、それからにつこりと笑つて言った。

「許すも何も…先にも申したとおり、竈が焼けるなど日常茶飯事でございます。皆が心配しておりますゆえ、明日は何か少しでもお召

し上がりになりますよう。それでは」

扉が閉まると、龍神は滑り落ちるように床に座り込んだ。しばらくの間向かいの壁を見るともなしに見ていたが、ちらと文ふみに目を遣った。ずいぶん長い間そうやって文の表を見つめたあと、無造作に掴み取って開いた。読み終わると、さつき自分が掴んだ時に出来た皺を丁寧に伸ばして元通りに包み、宝剣の隣に置いた。

翌日、龍神は供物に少しだけ箸をつけると本殿を出た。

それからいくらか日が過ぎ、稲穂が首を垂れる季節になった。収穫が終わると村は秋祭りの準備一色になった。祭りの前日、龍神がふらりと神社を訪れた。

「これはこれは龍神様、お早いお着きで…。まだ他の神様はまだお越しになっておりませんようです。ああ、今御神酒を…」

神主の言葉が終わらないうちに、向こうから巫女と竈の神が三方さんぽうを持ってやってくる。龍神は声をかけた。

「へつついさま、そろそろ戻られるか。同道いたそう」

竈の神はにっこり笑った。

「すっかり元氣になりましたな。ええ、ちょうど戻ろうと思っておったところでございます」

竈の神と龍神は神社を出ようとした。すると巫女がためらいながら声をかけた。

「あたしも付いてっつていい？」

「おいで」

龍神がかがんで手を伸ばした。

三人は領主の家に向かった。門番は龍神を見ると腰を抜かした。

「今日は乱暴しに来たのではない。主に話がある。目通り願えるか」
今度はあつという間に領主が飛んできたばかりか、三人を上座に上げ、饗応じやうおうの仕度したくまで始めさせたようである。用はすぐ済むからと断って龍神が話し始めた。

「貴殿の屋敷のへつついさまをお預かり致しておったゆえ、お返しに参った。以後大切にお祀りするよう」

領主は額を床に擦り付けている。

「もう一つ、大切な命を言い渡す」

領主は消え入らんばかりの声で何なりと、と言った。

「そなた、蛇神様の御神体を倉に放り込んでいたであろう。村人が仮の社を建てて祀っているが、そなたに心があるなら、きちんとお祀り致せ」

「はあ、それはもう、立派なお社を建てて…」

「金のことではない。頼んだぞ」

龍神はそう言い残して立ち去った。巫女が後に続く。領主はしばらくそのまま這いつくばっていたが、やがて起き上がると気が抜けたように天を仰いで溜息をついた。

帰りがけ、龍神は再び門番に声をかけた。領主の妻の墓の場所を訊いたのである。門番は汗をかきかき、場所を教えた。

龍神は墓所に着くと、道すがら手折った花を手向けた。

「さあ、帰ろう」

二人は手をつないで歩き始めた。

「そなたは私を祀って何年になるのだ」

「三年」

龍神は目を見開いて巫女を見た。永遠ともいえる歳月を生きてきた彼女にとって、三年は一瞬に近い時間だ。だが人間の子供である巫女にとっては、人生の大半を龍神に捧げてきたことになる。斜め前を歩く巫女の表情はよく見えない。

「その三年を私が忘れてしまったのは、辛いか」

巫女は黙って頷いた。

しばらく沈黙が流れた。村の方からかすかに祭の笛の音が聞こえる。それにつられて龍神がふと歌を口ずさんだ。

「それ、あたしが教えてあげた歌！」

巫女が勢いよく振り向いた。龍神は再び巫女を見つめた。そして、急に巫女を抱き上げると肩車をして駆け出した。あとには甲高い笑い声だけが、群青色の空に吸い込まれていった。

それからどれくらいの日が流れただろう。今も、領主の妻の墓のあった辺りには、龍神の手向けた草が、秋になると花を咲かせるという。

注釈

注釈 単語の後に「古」とあるものは、旺文社 古語辞典 第九版による。

奥^{おく}つ城^き「古」 : 墓。神や霊の鎮座しているところ。

北^{きた}の方^{かた}「古」 : (寢殿造りの北の対に住んだところから) 貴人

の正妻の敬称。奥方。夫人。|| 北の台。

対^{たい}の屋^や「古」 : 寢殿造りの建築で、寢殿 (|| 正殿) の左右 (||

東西) や背後 (|| 北) に造った別棟の建物。夫人・家族・女房が住

んだ。|| 対^{たい}。

領主^{りょうしゅ}・国守^{こくしゅ} : 作品の舞台となっているのは平安時代だが、正確

にはそのような官職はない。当初国司と郡司にする予定だったが、

国司が中央任官であるのに対し、郡司は主に世襲制であったため、

郡司が国司に阿^{おもね}る必要があるのかという疑問が沸き、ぼかした記述

にした。

あとがき

この物語は、2001年の同時多発テロが起きた際に、キリスト教とイスラム教について調べていて、どちらもユダヤ教の聖典を引き継ぐ、いわば兄弟のような宗教だということを知ってシヨックを受けたことに端を発して生まれました。当初、それぞれ別の一神教を国教とする二つの国が戦っていて、主人公が奇跡のように丸く収めるという英雄譚のような話を考えたのですが、自分自身が一神教の宗教を理解してもいないうえ、十字軍遠征などについて膨大な調査をしなければならなかったため頓挫していました。

ある日トイレを掃除していて、「そういえばトイレには便所の神様がいるのよね、台所にはへっついさん(お荒神さん)もいて…」な

どと思っっているうち、「日本の神様の話ならうまくいくかも」とひらめき、書店で神道の入門書を買ってきて一気に書きあげました。そんなわけで調査に殆ど時間をかけていないため、神道や歴史について、間違った記述があると思いますが、テーマは別のところにあるので、あくまでファンタジーとしてお楽しみ頂けたらと思います。また、児童文学的な部分があるので、読みづらいと思われる漢字には積極的にルビを付けました。携帯でお読みの方は少し読みづらかったと思いますが、ご了承頂けたらと思います。この物語にも自分なりに盛り込んだテーマがあります、そもそも書こうと思ったきっかけが宗教対立なので、今回のこの話はまだまだ導入部分でしかありません。いずれ続編を書きたいと思っています。最後になりましたが、この物語を書くきっかけを下さった便所の神様、へつついさま、そして最後までお読みいただきました読者の皆様、公表の場を与えてくださったウメ様に感謝します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9739b/>

神の奥つ城(おくつき)

2010年10月9日21時04分発行